

---

# バカとエクソシストと召喚獣《イノセンス》

きこりん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとエクソシストと召喚獣<sup>イノセンス</sup>

### 【Nコード】

N7649Z

### 【作者名】

きこりん

### 【あらすじ】

「君たち、学校に行ってみないかい？丁度良いところがあるんだ」コムイの計らいで、初めて学校に通うことになったアレン、神田、ラビ、リナリー。しかし彼らが通う学校 文月学園 は、ちよつと変わった学校だった。 バカテスの世界にDグレティーンズが参戦！そしてコムイの計らい（策略）はこれだけではなかった！？ギャグコメディ風味、バカとエクソシストと召喚獣<sup>イノセンス</sup>！！

【第一話】不安な呼び出し〜アレン・ウォーカー〜（前書き）

にじファンへは初めての投稿<sup>1</sup>3  
はじめまして きこりん です。

今回はクロスオーバー作品、バカとエクソシストと召喚獣<sup>イノセンス</sup>を  
のんびりですが進めて行こうと思います

拙い文ですが、よかつたら読んで行ってください>（――）<

## 【第一話】不安な呼び出し／アレン・ウォーカー／

ある晴れ晴れとした夏の日の昼下がり

白髪の少年アレン・ウォーカーは、いつも一緒にいるティムキャンピーと共に室長室へ続く薄暗い廊下を歩いていた

…いかにも嫌そうに

それと言うのも今から20分ほど前

食堂で山盛りの食事を目の前にして至福の時を過ごしていたアレンのもとに、任務ではない呼び出しが伝えられたことによるものだった。

「アレン、室長が呼んでいたぞ。食事が終わってからで良いから来いとさ。」

「任務じゃないんですか？」

「どうやら違うらしい。俺も詳しいこと聞いてないからなあ」

リーバー班長から伝えられたそれは、アレンに苦い過去を思い出させる。

むろん、たびたび教団を壊滅させそうになる問題児（？）、コムイがらみの事件である。

伝えに来たリーバーも、眉を八の字にして「まったく室長は…」とため息をつきそうな雰囲気だった。

いや、言っていたかもしれない

そんな経緯で、しっかりと昼食を食べ終えたアレンは室長室へ向かっていった。

重そうな、しかしいつもあけ慣れている室長室の扉の前に立ち「いや、待てよ」と考えなおす。

ここまでマイナスなことばかり考えてきたが、曲りなりにもコムイはここ黒の教団をまとめる人間（のはず）だ。もしかしたらこの呼び出しも、僕とリーダー班長の予想に反して、何か（危険なことじゃない）重要なことかもしれない。

そう思い、「大丈夫だね」と頭上で羽ばたくティムキャンピーに声をかけたアレンは

室長室の扉をゆっくりと押し開けた。

【第一話】不安な呼び出し／アレン・ウォーカー（後書き）

きこりん「お初にお目にかかります、きこりんです」

アレン「バカとエクソシストと召喚獣<sup>イノセンス</sup>、始めましたね」

きこりん「長くて言いづらいから『バカエク』でいいよ」

アレン「なんだかその響き、府に落ちないのですが…まあいいや。」

きこりん（良いんだ…^^;）

アレン「ところで、なんで僕が後書きにまで出てるんです？」

きこりん「それはね…楽しそうだから」

アレン「正直に言ってください。どなたかを真似てるでしょう？」

きこりん「う…だってリスペクトしてる色んな方々の小説見て、やりたくなっただよお」

アレン「イミテーション」

きこりん「いえ、リスペクトです。」

アレン「まあ、いいです。そういうことにしておきましょう」

きこりん「さすがアレンさん。お心が広い」

アレン「紳士ですから」

きこりん（自分で言うか…）

アレン「言わせてるのはあなたでしょう？」

きこりん「？ごめんなさい」

アレン「ということで、こんなg d g dな作者への質問、意見等がありましたら」

アレン・きこりん「お待ちしております…！」

きこりん（なんかそれとなくぐさつときたが…？）

【第二話】 不安な呼び出し〜神田ユウ・ラビ〜（前書き）

第二話は神田視点で、お呼び出しのシーンです

ちなみに作者はDグレもバカテスも

原作が手元にありません（殴

そんな中で進めているので原作丸無視や

捏造どころの話じゃなくなりそうです……

…受験終わったら揃えようかな



## 【第二話】 不安な呼び出し 神田ユウ・ラビィ

いつものように教団の敷地内にある森で六幻をふっていた神田ユウのゴーレムに通信が入った。

『神田くん、都合がいい時でいいから僕のどこまで来てくれるかな？』

「何の用だ？」

キツとゴーレムを睨み付け、声の主であるコムイに問う。

任務ならば任務だと、コムイは言うはずだ。

任務以外の事で鍛練を遮られた恨みのようなものが、神田の、ゴーレムの向こうにいるであろうコムイを睨み付けるまなざしに含まれていた。

『来てくれるから話すよ』

それだけ言うと、一方的に通信は切られた

しばらくそのまま、神田の目の高さにいるゴーレムを睨み付けていたが、通信のせいで集中力が切れたのだろう。

ちっ、と舌打ちをしてから六幻を鞘におさめた神田は高く結いあげてある彼の長い髪をなびかせて  
教団の建物の中へ入っていった。

「お、ユウもコムイに呼ばれたんさ？」

神田が教団の廊下を室長室に向かって歩いていると、ふいに背後から声をかけられた。

「俺のファーストネームを口にするんじゃないやねえ」

ギッと神田が睨みつけた先にいたのは、赤毛で、右目に眼帯をしているラビだった。

「おお、こわ。」と、肩をすくめてさらりと神田の視線を受け流したラビは言葉を続ける。

「ところで、なんで呼ばれたか聞いてるさ？」

「知らん」

「やっぱりかー」

頭の後ろで手を組み、先に歩き出した神田の横を歩くラビ。  
神田もあきらめたようにそのままラビと共に室長室に向かった。

【第二話】不安な呼び出し／神田ユウ・ラビ（後書き）

きこりん「第二話ですゝなんとか書きました」

ラビ「でもまだ俺ら教団にいるんさね？」

きこりん「…いましばらくお待ちください」

神田「おい、テメエ勉強はどうした」

きこりん「ギクツ…だ、第一関門（の試験）はとりあえず終わってたんだよ？」

ラビ「でも次の試験まであと20日さ」

きこりん「うう…ゴメンナサイ」

神田「まったく、我慢を知らねえのか？」

きこりん「お預けというものが苦手なのです…ほんとに」

ラビ・神田「はあ…」

きこりん「そんな二人してため息つかなくてもお…ただ、今頭の中にある話は出し切りしたいんだよお」

神田「あきらま「無理です（きこりん）」

ラビ「早っ!？」

きこりん「…こんなきこりんですが質問、意見などありましたら喜んで受け付けますので」

ラビ・神田「「これからもバカとエクソシストと召喚獣をよろしく

「さ」「頼む」

きこりん「あ、長いから『バカエク』でも…いっ!？神田さん、そんなに睨まないでください（泣」

ラビ「響きがちよつとなあ…」

**【第三話】不安な呼び出し〜リナリー・リー〜（前書き）**

実は…っていう暴露話は後書きにしまして…

今回はリナリー視点で、コムイさんに呼び出されます

### 【第三話】不安な呼び出しリナリー・リー

陽射しのまぶしい夏のある日

任務から帰ったショートヘアの美少女リナリー・リーは、教団の室長でもある彼女の兄のもとへ向かっていた。もちろん任務の報告のために。

「ただいま、兄さん」

「おつかえり。リナリー、怪我はなかったかい??」

室長室の扉をあけると、両手を広げた兄、コムイ・リーが満面の笑みで出迎えてくれた。

その兄と言うのもシスコンの中のシスコン。この文章の中で表現しきれないのが申し訳ない。

「大丈夫よ」と微笑みかけ任務の報告をする。今回はイノセンスは無い、いわゆる『ハズレ』の任務だったが。

リナリーが一通り報告を終えると、コムイは「そうだ!」と何かを思い出したようにリナリーを見つめていた瞳をいつそう輝かせる。

「この後また話があるから、ここに来てくれるかな?」

…兄さんはちゃんと報告を聞いていたのかしら。

キラキラと自分を見つめている兄の様子に、そんな一抹の不安を覚えながら「分かったわ」とリナリーは部屋を後にした。

任務の汗を流し終え再び室長室へ向かうと、兄の姿が見えない代わりに  
ソファーにはすでにラビと神田が座っていた。

「あら、二人とも兄さんに呼ばれたの？」

「ああ。まったくあいつは自分から呼んどいてどこほつつき歩いてんだ」

「きつと、またリーバー班長にでも追っかけられてるさ。リナリーは任務帰りさ？」

「ええ。さっき帰ってきたの」

不機嫌そうな声色の神田と、おかえり、とリナリーに笑顔で声をかけるラビ。

神田は相変わらず腕を組んで座ったまま、扉の前にいるリナリーに顔は向けない。だが、その背中はおかえりと言っているように見え、リナリーはただいま、と微笑む。

ラビがポンポンと自身の隣のスペースを示すので、それに従ってソ

ファーに腰を下ろすとそれとほぼ同時にまた、しかし遠慮がちに室長室の扉が開かれた。

「失礼します… ってあれ、コムイさんは？」

ひょこつと顔をのぞかせたのは、白髪の少年、アレン・ウォーカーだった。

まだ来てないさ、というラビの横で、「ちつ、モヤシもか…」とつぶやく神田の声をアレンが聞き逃すはずもなく

「なんだ、神田もでしたか」

と、今にも（恒例の）小競り合いが始まろうとしていた。だがそれは待ち人の登場によって幸運にも（？）遮られる

「みんなお待ちせう。さあさあ、アレン君も座って」

ヨッシーのマグカップを持って笑顔で現れたコムイ。

しかしその後ろで書類を持たされて（おそらくコムイのわがままに付き合わされたであろう）疲れた面持ちのリーバー班長を、そこにいた（コムイ以外の）全員が気の毒に思ったのは言うまでもない。



### 【第三話】不安な呼び出し〜リナリー・リー〜（後書き）

リナリー「やっと登場出来たわ。ねえ、前置きの部分長くない？」  
きこりん「そうなんですよ。本来ならすぐにでもバカテスの世界に飛ばすべき

なのですが…どうしてもDグレの世界が広がってきて  
リナリー「で、短いながらもキャラごとに話を分けちゃったと」  
きこりん「お察しの通りで…でもやっとみんな揃いました！」  
神田「おい、前書きで述べた『実は…』って何だ？」

きこりん「そうだった（・・・）それなんですがね」  
ラビ「リナリーをメンバーに入れるか迷ったって話さ？」  
きこりん・リナリー「「！！！？どこからその話を」ねえ、それって本当なの？」

アレン「二人とも台詞がかぶってますよ」  
ラビ「コムイから『僕のリナリーをメンバーに入れないなんてひどいっ』

って愚痴られたさ（苦笑）」  
きこりん「それ言われたんですよ、うちの中にいるコムイさんに…」

アレン「そういえばここ、もはやネタばれしてませんか？」

きこりん「…あらすじでばらしてる部分だから（まだ）大丈夫！^  
^」

リナリー「こんなおおざっぱな作者だけど、質問意見は喜んで対応するらしいわ」

ティーンズ「「「バカとエクソシストと召喚獣をよろしく」ね」  
さ」頼む」

きこりん（私の中でのティーンズって…？）

【第四話】コムイの計らい（前書き）

や っ と だ ！

とうとう呼び出しの正体が分かります。長らくお待たせいたしました（と言っても同日UPだけど…）

そして今回も暴露（？）裏話を…

#### 【第四話】コムイの計らい

「君たち、学校に行ってみないかい？」

にこにこと上機嫌のコムイが椅子に座るなり言った言葉は、エクソシストとして日々AKUMAと戦っている彼らにとって、一瞬だが、理解しがたいものだった。

「学校、ですか？」

沈黙を破ったのはアレンだった。それに続いてラビやリナリーも疑問を飛ばす。

「コムイ、いきなりどうしたんさ？」

「そうよ。それに私たちにそんな暇は無いんじゃない？」

神田に至っては腕を組んだまま「何を企んでやがる」と言わんばかりに、コムイを睨みつけていた。

そんな彼らにコムイは言葉を付け加える。

「もちろん任務がある時は任務に行ってもらうよ。けどみんな、学校に興味はない？」

全員がうつ…と言葉に詰まる。

エクソシストとして幼いころから教団にいた神田、リナリーに加え、ブックマンJr.として各地をまわってきたラビ、それに実の親に捨てられてから、養父と無鉄砲な元帥により育てられたアレン。彼らは皆、学校と言うところに行ったことはなかった。

エクソシストとして、AKUMAを救済するために今までを生きてきたと言っても過言ではない彼らだからこそ、学校と言う平和に思える世界に興味はあったのだ。

「僕はそんなみんなに、学校と言うところを経験してほしかったんだ」

もちろんいい意味でね。と、それぞれの心を見透かしたように、コムイはやさしく言う。

「それに、丁度良い学校を見つけたんだ。リーバー君、みんなに資料を渡してくれるかな」

そこでやっと、ずっと立っていたリーバー班長がはつとしたように動く。

…もしかして立ったまま寝てたのか？なんて疑問はとりあえず置いておくとして、全員が渡された資料に目を通す。

「ふみづき学園？」

「日本か？」

ローマ字でふられた読み仮名に、神田が反応する

「そう。と言ってもそこは並行世界の日本なんだ。そしてその学校は、他とちょっと変わってる。そこが君たちに丁度良いんだけどね」

「どう変わってるの？」とリナリーが聞くと、「よくぞ聞いてくれました！」とコムイが立ち上がる。

コムイの話によると、その学校では個々人のテストの点数によって試召戦争というものが行われているらしい。結局戦うのか、と一同はこっそりため息をつく。しかし戦うのは本人ではなく、召喚獣という自分の分身だという話だ。

「でもちよつと待ってください。ラビはまだしも、僕たち勉強すらしたことないですよ？」

「だから学校に行くんだよ」

あっけらかんと言つてのけるコムイに、それもそうかとうなずく四人。

「とりあえず向こうの学園長に話はつけてあるから。はい、これ」

そう言って渡されたのは男子は青、女子は赤を基調とした文月学園の制服だった。

#### 【第四話】コムイの計らい（後書き）

きこりん「ふー、やっと教団を出ますよ」

アレク「まさにgdgdと進んで行きますね。読んでくださった方、お疲れ様です」

きこりん「そして書いていて気付いたことがあるので、

リナリーの時の話をちよいと手直ししてきます」3

神田「ちよつと待て」（ガシッ）

きこりん「はい？」

リナリー「前書きに書いた暴露裏話がまだよ？」

きこりん「ああ！」

ティーンズ（（（忘れてたのか）））

きこりん「それなんですがね、時系列について悩んでたんですよ。

出来ればDグレの設定をずらしたくないけど、アレクのイノセンスを

クラウン・クラウンにするとリンクをどうするか迷うし

…」

ラビ「で、結局のところ？」

きこりん「方舟を出さないとバカテスの世界に行けないので、

リナリーの髪形を直してきます」3

アレク「…走って行っちゃいましたね」

ラビ「あれ、書置きがあるさ…」リンクを出すかはおいおい考えます」

リナリー「相変わらずおおざっぱね」

神田「はあ…本当に進むのかこの話」

…頑張つて進めます。ここからはのんびりになると思いますが。

意見質問ありましたら喜んで受け付けますので、これからよろし

く  
お  
願  
い  
し  
ま  
す  
！



**【第五話】 転校生（前書き）**

とつとつバカテスの世界に入ります！

## 【第五話】転校生

ある晴れた夏の日の朝の事

文月学園二年Fクラスに、ある一報が届いた

「…転校生がこのクラスに入るという情報を得た」

ムツツリーニこと土屋康太はスタタタ、と小走りに教室に入るや否や、そこにいた観察処分者である吉井明久とクラス代表の坂本雄二に耳打ちした。

「この中途半端な時期に転校生だと？」

雄二の言葉に、冷房のない教室でうだうだしていたFクラス全員が敏感にも、その場で耳をそばだてる。

「どんな人かわかる、ムツツリーニ？」

「男が三人…」

男かよ。なーんだ。という空気が教室に広がる。だが次の「…と美女が一人」という言葉で、そこは一気に色めき立った。

「なんだかわくわくしますね」

「どんなところかしら」

ここでしばらく待つように、と通された部屋に四人はいた。たくさん机や椅子そして数えきれない量の本が並ぶ様子からして、そこは図書室なのだろう。木漏れ日が差し込みむせかえるような紙の匂いに、それぞれがブックマンの部屋や室長室を思い出しながらそわそわと呼ばれるのを待っていた。

コムイの勧める、と言うところに不安はあつたものの、いざ学校に足を踏み入れるとやはり期待や興奮があるもの。それは言葉に出したアレンやリナリーに限った事ではなかった。

「しかし、編入早々試験を受けさせられるとは思わなかったさ」

少し離れたところで本をめくっていたラビが苦笑いで言う。彼らは先程まで、召喚獣の強さのもととなる点数を確保するためにテストを受けていた。もちろんそれまでテストというものを受けたことが無い彼らにとって、それも貴重な体験の一つとなったのだが。

「そうですね。数学や英語は何とか分かったんですが、国語はちょっと…」

「神田なら読めたんじゃない？」

「いや、俺も日本語を学んだことはない」

日本の学校であるため問題もほぼ日本語。それが彼らにとって少なからず壁となっていたようだ。すると突然、図書室の扉が開かれた。そこに立っていたのは、先程

の試験で監督をしていた西村宗一という、いかにも体育会系な体つき  
の先生だった。

「編入早々の試験、ご苦労だった。これから教室へ案内するからつ  
いてこい」

そして四人はFクラス<sup>最下位クラス</sup>へ、編入した。

その頃どこから漏れたのか、あらゆるクラスの男子生徒が授業中にも  
関わらず、しきりに廊下を気にしていた。むろん、『美少女』を  
見るためである。その様子を呆れたまなざしで見ていた女子生徒だ  
ったが転校生が通りかかると、そのまなざしを好奇の色に輝かせた。

「…なんだか随分見られてませんか？」

「そりゃ、どう見ても日本人の顔つきじゃないからなあ」

珍しいんさ、とあくまで軽く受け流しながらも目の合った女子に手  
を振るラビ。その様子に頬を染めた生徒の数知れず。神田は馬鹿ら  
しいとため息をつき、さっさと歩いて行ってしまふ。

物陰からそれをカメラに収めている人がいるなんて誰も気づかなか  
った。

「……最新情報」

ムツツリーニが息を切らすことなく、しかしすばやく教室に入ってくる。教師不在のため自習となっていたFクラスは、ムツツリーニの言葉の続きを聞こうと一瞬にして静まり返る。

「一人は日本人、美少女はアジア系……おそらく中国人、他の二人は良く分からないが西洋系の顔立ちだった。」

そう言つて先程撮ってきた写真をピツと目の前に掲げる……随分とローアングルのものが多い

「……一枚500円」

教室の隅で男だけの、静かながらも熱い競<sup>せ</sup>りが始まった。

「さすがムツツリーニ、情報が早いな」

「ドイツ出身はいるかしら」

雄二がその輪から離れたところで感心していると、ドイツからの帰国子女である島田美波が尋ねてくる。彼女もまた、日本語が読めずに試験で苦勞していた一人である。

そこに、立てつけの悪い扉が音を立てて開いたかと思うと、鉄人ごと西村先生が噂の転校生をつれて教室へと入ってきた。



## 【第五話】転校生（後書き）

きこりん「いつもより長めでお送りしました！そして場面展開の多さ、

読みづらくて申し訳ありません<>」

雄二「とうとう俺らも登場だな。まだ転校生とやらに会ってはいないが」

きこりん「それは次回のお楽しみで」

…ここで参考までに。エクソシストはDグレでは英語で会話している、という設定ですがここでは物語の都合上、バカテスキャラとも日本語で会話が成立しています。理由づけは何か考えますが、無理やり感あふれる後付けになると思うのでご了承ください>（

—<

それでは、意見質問ありましたら喜んで受け付けますのでこれからよろしく願います！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7649z/>

---

バカとエクソシストと召喚獣《イノセンス》

2011年12月25日23時45分発行